

「やってみたい!」から、ミライをつくる授業



発行所 岡山県立勝山高等学校 葛山校地
〒717-0505 岡山県真庭市勝山上長田4

TEL | 0867-66-2016 FAX | 0867-66-4221
E-mail | katuyama-hiruzen@pref.okayama.jp

岡山県立勝山高等学校 葛山校地
ひるゆづり

ひこう独自の授業「CP」とは？

Community building Project

「やってみたい」を形にすることを大事にしている授業です

CPは、生徒が中心となって地域の魅力や課題を発見し、

主体的にアップデートするプロジェクト型の授業です。

2020年、それまでの職業体験や調べ学習中心のものから、

生徒自身の「やってみたい」を形にすることを重視するスタイルへと大きく転換しました。

地域の大人たちと対等に話し合い、協働します。

この5年間の歩みは、

生徒たちがミライを切り拓く資質を磨くための、挑戦の軌跡でもあります。

真庭市学習交流センター 「三座館」

生徒考案の愛称を持つ、「寮」と「交流」の複合施設。授業のほか、カフェや合宿等、高校生と地域が温もり合う新たな拠点。

真庭市 蒜山エリア

環境政策の先進地であり、日本最大のジャーシー酪農やスキーリゾートでも知られる雄大な高原地帯。ここが探究活動の舞台。

蒜山ミライ会議

地域住民や行政と高校が協働し、活性化を推進する会議体。地域の意識を変える合言葉や新たな挑戦の種が生まれる場。

成果発表の プレゼンテーション

校内外の探究活動発表の場で報告。高校生夢育PBフォーラムなど、BeLiveでは、2023年に優秀賞、2026年は最優秀賞を受賞。

どのように行われているの？

履修するコースに関わらず全ての生徒が受講します。

1年次は週に1時間、2年次・3年次では週に3時間の授業を行い、

段階的にプロジェクトと生徒の主体性を発展させていきます。



「地域を知る」



「地域と動く」



「地域を変える」

1年次

● 対話と発見のフィールドワーク

仲間とのワークや地域の自然体験を通じ、SDGsや真庭の課題を自分事として学びます。

● プロジェクトへの第一歩

夏は地域への「爪痕」を残すインターンシップ、秋は伝統の妖怪サイトン制作に挑戦します。

2年次

● プロの視点に触れる探究プロセス

地域の事業所への取材や先輩の活動の追体験をして、自分たちが挑むテーマを深めます。

● 地域と協働する実践プロジェクト

興味関心に基づきチームを結成。大人の協力を得ながら、試作や実験を繰り返し形にします。

3年次

● プロジェクトの継続と深化

2年次の振り返りをしてプロジェクトを継続・発展。生徒が主体となり、より自由で深い活動を展開します。

● 多世代・多文化との共生を学ぶ

表現活動や、外国人・赤ちゃん等とのふれあいを通じ、多世代・多文化との交流を連続的に学びます。



学校設定教科「CP」5年間のプロジェクト活動

2021年度 卒業生 キーワード 失敗する学校

生徒自身が失敗を肯定し、チャレンジするという意識が生まれ始めました。



中庭に「色彩」を!

木工職人の中山真さんの協力のもと、真庭産材でウッドデッキやテーブルを自作、花壇を整備。学年をこえた交流が生まれる憩いの場を創出。



うおうおハンバーグ

特別天然記念物「オオサンショウウオ」の食文化を祖父母世代に聞き取り、鶏肉や山椒で再現。地元飲食店「高原亭」のメニューに採用。



蒜山PR動画

映像プロデューサーの池田裕さん協力のもと、高校生視点で蒜山の魅力を発信する動画を制作。YouTubeで公開。

2022年度 卒業生 キーワード 全員が次世代

蒜山ミライ会議の生徒の言葉で大人の意識が変わり始めました。



Project蒜香

800年続く伝統の「山焼き」に着想を得て、剪定枝等で「蒜山の香り」をイメージしたお香やアロマウォーターを制作。湯原ししマルシェ等で販売。



Project蒜香

800年続く伝統の「山焼き」に着想を得て、剪定枝等で「蒜山の香り」をイメージしたお香やアロマウォーターを制作。湯原ししマルシェ等で販売。

2023年度 卒業生 キーワード 蒜校RPG

蒜山を始まりの村に、仲間とSDGsというラスボスを倒す冒険へ。



「ウクライナ×蒜山」郷土料理プロジェクト

日本へ避難された方へのインタビューを元に、卒業生/料理人の杉村洋美さんの協力のもと、蒜山産食材で東欧料理レシピを開発。クックパッドで公開。



キャンプ場まともサイトプロジェクト

蒜山のキャンプ場を取材。「環境」をテーマにした観光客をイメージし、高校生の視点で、蒜山の魅力を真庭のイベント紹介サイト「ManiColle」に掲載。



「ひるしき」&「ひるこーら」の販売

塩釜湯水を用いたクラフトコーラ等を開発・販売。利益は人道支援団体への寄付や後輩が使える電子レンジ購入に活用。

2024年度 卒業生 キーワード 蒜山のファンを増やす

蒜山に住んでいなくても、訪れたことがなくても「蒜山っていいよね」と言ってもらいたい。



JOY BOYS 蒜校

廃材や休止中のスキー場設備を利用し、八束小学校の子どもたちを対象にソリ滑りや外遊びを企画・運営。



SHORT MOVIE PROJECT

映像クリエイターや音楽家の協力も得て、高校生視点のショート動画をSNSへ投稿。歌唱動画(THE FIRST TAKE風)も撮影・編集。



蒜山Sweets NEO

キャラクターを描いたアイシングクッキーを制作。販売は難しく、八束小学校の子どもたちを対象にアイシングクッキー教室を開き、交流。



コンコンProject

特産である蒜山大根の切り干し大根の新たな可能性を探り、JA精れの国岡山女性の蒜山支部や飲食店の方に助言を得て定食レシピを開発。

2025年度 卒業生 キーワード 井の中の蛙 大海を知らず、されど空の青さを知る

広い世の中ではないけれど、蒜山での「やりたいことに臨むこと」と自分のミライがつながっていく。



ファーストキッシュ

蒜山産食材を用いた料理に挑戦。蒜山ジャージー牛乳やハバラギ農園の卵、鹿肉等のキッシュを開発し、マルシェや三座館の開所式で提供。



ドリンク班

健康になれるドリンクを目指し、カルチベートガーデンのブルーベリーや甘酒など、蒜山の素材を用いたドリンクを開発し、地域の方へ提供。



蒜山産物産物

郷原漆器職人のデービット・デイロングさんと自然栽培農家・蒜山耕藝がコラボした真庭市のふるさと納税商品プロデュース。漆塗りに挑戦。



SUPER WHITE RADISH Project

蒜山大根の新たなレシピを生産者と開発。大根入りたこ焼きを地域のマルシェで販売する「がちゃポン焼き」の新メニューとして、提案。



僕らの仮想モノガタリ

VTuber「大宮あいを」を活用し、動画の題材や脚本づくりに挑戦。プロの声優から指導を受け、自分たちの作った台本で収録。



どんぶらっこProject

放置竹林の竹で道具を自作。実際に川遊びをし、水鉄砲やイカダをつくる企画を立て、川遊び体験会を「HIRUKO SUN 3 FES」で実施。



HIRUKO SUN3 FES

3年次には、活動の集大成として、蒜山のファンを増やすためのフェスを開催。「やまびこマーケット実行委員会」の協力を得て約500人が参加。



増づくりプロジェクト

バス待ちの生徒等が待つ場所を目指し、旧校舎の不用品を廃棄し掃除。ソファや漫画を設置し、生徒が放課後に活用できる場を創出。



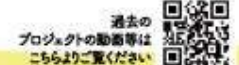
フサヒゲリカミキリの保護活動

絶滅危惧種フサヒゲリカミキリの保護活動に参加。専門家へ取材し、産卵等を行う植物のユウゴウの栽培や植込付け活動にも参加。



ひるこう祭

3年次には、前年フェスを参考に「三座館」を舞台に知名度向上をかねて実施。開発した商品の販売や試飲、焼きそば400人前を完売。約600人が参加。



過去のプロジェクトの動画等はこちらよりご覧ください。



「やってみよう」を形にする中で生まれる挑戦や失敗、地域との関わり。それらは、どんな学びや価値があったのか？卒業生や中心として関わる教員たちに、今の思いを聞きました。

やりたいことがあるから、やってみる

川上さん 中学までの学びを、ここでは自分で取りに行く学びに変える。それがCPの核心だと思っています。

永田先生 興味を押しつけていないんですね。やりたいことがあるから、やってみる。藤山校地には生徒自身から出てきた失敗する学校というキャッチコピーがあります。つくってみよう、まずいよね、失敗だったよね。それで良いんです。すべて生徒たちの発案なので、だから楽しさになっているんです。

内田先生 例えば、切り干し大根から新しい料理を考えるプロジェクトがありました。いろいろつくってみるなかで、どうすれば藤山のお土産になるんだろう、どう活性化できるんだろうって。切り干し大根から世界が広がっていくんです。

生徒の本音から生まれた言葉って強いんです

横本さん あるとき、クラスメイトと「僕たち高校生を勝手に次世代って呼んで、その次世代に地域を任せるなんて無責任なだけだね」って話になって。だからここ(藤山)にいる人全員が次世代なんだって大人にもメッセージを出して。そういう意味では、始まりはグテだったように思います(笑)。

内田先生 グテって本音ですから(笑)。だから地に足の着いた言葉として多くの方に響いたんだと思います。発表後、真庭のSDGsを象徴する言葉となりました。

小谷さん 私も最初は、人口流出とか空き家問題とか一般論のような課題を挙げていたんです。でもどうしてCPに取り組むのか？を何度も考えて、藤山のファンが増えてはしって素直な言葉が出てきました。

川上さん そうして藤山のファンを増やすをテーマにして、地域の人たちも巻き込んだHIRUKO SUN3 FESに発展しました。

内田先生 生徒の本音から生まれた言葉って強いんです。CPではそれを大切にしています。

生徒が「やりたい」と言ったら、まずは一緒に調べる

豊本さん 僕らの場合は、みんなで家、建てたくね？って言い出したんです。しかも、授業中じゃなくて休み時間のときに。

永田先生 家を建てるって言うから、こちらも本気で考えましたよ。予定地も見に行つて。生徒がやりたいと言ったら、まずは一緒に調べる。これが藤山校地の先生のスタンスだと思っています。

内田先生 CPに携わる先生って、答えを言わないんです。考えてもらう、もしくは一緒に考える。だから生徒にとっても、本当の意味で自分のものになっていく。

横本さん めっちゃ苦労した試作だったり、方向性のすり合わせだったり。でもその記憶がいまでもちゃんと残っています。

卒業生にきいた CPぶ、チャット-7

令和8年
2月27日(金)



真庭市学習交流センター
三座館101



うちだ ひろゆき
内田 浩文 先生
指導教諭 / 国語科

藤山校地7年目。CPに加え、プレゼンテーションの指導も担当。生徒の言葉を拾いあげ、キーワードを生み出すことを応援する。



こに ももほ
小谷 百葉 さん
2024年度卒業生

藤山出身。子どもと関わるのが好きで、保育士になることを目指して、岡山市内の大学に進学。



よねだ こうへい
横本 康平 さん
2022年度卒業生

藤山出身。藤山校地での経験から、高校の国語科教員を志す。現在は岡山市内の大学に在学中。



とよなか あきら
豊本 晃理 さん
2023年度卒業生

真庭市湯原出身。専門学校を卒業し、現在は地元での活動を模索して、家業のガラス工房のお手伝いなどしている。



かがわ りょう
川上 翔 さん
真庭市教育文化コーディネーター

大阪から藤山の中和地区に移住し、2023年からCPや三座館での暮らしや活動のサポートをしている。



ながた ひろし
永田 浩史 先生
教諭 / 理科

藤山校地8年目。藤山ミライ会議やCPの立ち上げに関わる。生徒と一緒にやってみることを大事にし、サポートしている。

卒業生にきいた？



「始まったな」って感覚がありました

永田先生 どの学年も3年間のどこかで、必ずスイッチの入る瞬間があるんです。生徒と先生がもうごっちゃになって、人間同士として向き合えるようになる。そこからCPが加速していきます。

小谷さん 私たちの場合は、テレビの取材が来るようになってから(笑)。自分たちはやりたいことをやっているだけだけど、それを評価してくれる大人がいるって。そこでモチベーションが変わっていったと思います。

横本さん 僕たちはクラスメイトが7人で、でも、1人ずつの個性を出していこうってなった瞬間に始まったなって感覚がありました。

内田先生 CPって結果を求めるとはなくて、突き詰めようなんですよ。

**CPを通じて、
学問の世界も広がっていく**

永田先生 CPを通じて、学問の世界も広がっていく。学問の世界ってこんなに楽しいんだって気づく。それはCPに携わる私たち教員も同じです。

内田先生 イベントをやろうと言ったときに、そんなことやってどんな意味があるの？って上から来る先生は、ここにはいません。面白いよね、じゃあ一緒に何しようかと言える関係性です。

川上さん 藤山校地って、2回藤山校地になるんです。ひとつは入学したとき、それから先生や地域の人と接しながら、CPにも取り組んで、もう一回藤山校地になる。所属だけでなく、中身も伴っていく感覚です。

**藤山に行っていなかったら、
ただ普通のシンプルな人間に
なっていたかもしれない**

横本さん 人数が少ないから、出番と役割が多いんです。1人1人が何かしら役割を持たざるを得ない。それが大きかった。

豊本さん やったことがある。それが卒業してから価値になっています。この間も、専門学校の友達のクラフトコーラボリを手伝いました。「高校でやったことある！」ってなって(笑)。

内田先生 出合いや実践が多く、プレゼンも賞が送られて藤山校地は言われます。頭で思い描いたことではなく、本音から生まれたやりたいことを実践して、プレゼンはその後についてくる。プレゼンのためのプレゼンになっていないんです。

小谷さん 藤山に行っていなかったら、ただ普通のシンプルな人間になっていたかもしれない。
川上さん どの学年にも言えることですが、ここでの3年間を通じて、自分の中にちゃんと残るものがあるんです。

**藤山校地には、CPがある
それが価値を高めている**

豊本さん 藤山校地は、ただ高校があるだけじゃなくて、CPがある。そして藤山という場所ならではのことをやっている。それが価値を高めていると思います。

川上さん CPって、学びのお手伝いだけでなく、出合いのお手伝いができる場所だと思っています。

小谷さん ここに戻ってくるたび、本当に心が軽くなります。